西郷と江戸開城談判（勝海舟）

西郷なんぞは、どのくらい太っ腹の人だったかわからないよ。手紙一本で、芝、田町の薩摩屋敷までのそのそ談判にやってくるとは、なかなか今の人ではできないことだ。

あの時の談判は、実に骨だったヨ。官軍に西郷がいなければ、談(はなし)はとてもまとまらなかっただろうよ。その時分の形勢といえば、品川からは西郷が来る、板橋からは伊地知などが来る。また江戸の市中では、今にも官軍が乗り込むといって大騒ぎさ。しかし、おれはほかの官軍には頓着せず、ただ西郷一人を眼(め)においた。そこで、今談(はな)したとおり、ごく短い手紙を一通やって、双方何処(いずこ)にか出会いたる上、談判致したいとの旨を申し送り、また、その場所は、すなわち田町の薩摩の別邸がよかろうと、この方から選定してやった。すると官軍からも早速承知したと返事をよこして、いよいよ何日の何時に薩摩屋敷で談判を開くことになった。

当日おれは、羽織袴で馬に騎(の)って、従者を一人つれたばかりで、薩摩屋敷へ出かけた。まず一室へ案内せられて、しばらく待っていると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の引っ切り下駄を履いて、例の熊次郎という忠僕を従え、平気な顔で出てきて、これは実に遅刻しまして失礼、と挨拶しながら座敷に通った。その様子は、少しも一大事を前に控えたものとは思われなかった。

さて、いよいよ談判になると、西郷は、おれのいうことを一々信用してくれ、その間一点の疑念もはさまなかった。

「いろいろむつかしい議論もありましょうが、私が一身にかけてお引き受けします」西郷のこの一言で、江戸百万の生霊も、その生命と財産とを保つことができ、また徳川氏もその滅亡を免れたのだ。もしこれが他人であったら、いや貴様のいうことは、自家撞着だとか、言行不一致だとか、たくさんの凶徒があのとおり処々に屯集しているのに、恭順の実はどこにあるかとか、いろいろやかましく責め立てるに違いない。万一そうなると、談判はたちまち破裂だ。しかし西郷はそんな野暮はいわない。その対局を達観して、しかも果断に富んでいたには、おれも感心した。

この時の談判がまだ始まらない前から、桐野などという豪傑連中が、大勢で次の間へ来て、ひそかに様子を覘(うかが)っている。薩摩屋敷の近傍へは、官軍の兵隊がひしひしと詰めかけている。その有様は実に殺気陰々として、ものすごい程だった。しかるに西郷は泰然として、あたりの光景も眼に入らないもののように、談判をし終えてから、おれを門の外まで見送った。おれが門を出ると近傍の街々に屯集していた兵隊は、どっと一時に押し寄せてきたが、おれが西郷に送られて立っているのを見て、一同うやうやしく捧銃(ささげつつ)の敬礼を行った。おれは

自分の胸を指して兵隊に向かい、いずれ今日明日中にはなんとか決着致すべし、決定次第にて、あるいは足下らの銃先にかかって死ぬこともあろうから、よくよくこの胸を見覚えておかれよ、と言い捨てて、西郷に暇乞い(いとまごい)をして帰った。

この時、おれがことに感心したのは、西郷がおれに対して、幕府の重臣たるだけの敬礼を失わず、談判の時にも始終座を正して手を膝の上に載せ、少しも先勝の威光でもって、敗軍の将を軽蔑するというような風が見えなかったことだ。

『氷川清話』